

当院 名誉院長 故 寺本成美 先生

没後15年 追悼記

没後15年、先生を知る人がすくなくなったようだ。生前、先生と親しくしていただき、かつ、ご指導を頂いてきた者として、先生の足跡をたどりながら、数々の思い出を綴ってみようと思う。

執筆者名

国立長崎医療センター 名誉院長 米倉正大

元 国立対馬病院 院長 森山忠良

国立小浜病院 名誉院長 北島陽夫

国立嬉野病院 名誉院長 廣田典祥

故 寺本成美(てらもと しげよし)先生 ご略歴

昭和8年長崎県生まれ。昭和38年長崎大学大学院医学研究科終了。昭和40年文部省在外研究員として米国ロチェスター大学脳研究所神経生理研究室及び同大学医学部神経内科学教室に留学。昭和41年米国医師試験に合格。国立大村病院脳神経外科医長、鹿児島大学医学部助教授を経て、昭和58年国立長崎中央病院の院長となる。平成11年長崎医療センター一定年退職、同院名誉院長。

平成16年9月ご逝去。



在りし日の寺本院長先生



自衛隊ヘリコプターに搭乗され、離島医療に貢献

没後 15 年、寺本成美先生を偲ぶ——その 1——

長崎医療センター名誉院長 米倉正大

寺本成美名誉院長が逝去されたのは、2004 年(平成 16 年)9 月 11 日であった。もう 15 年も前になる。

私が、寺本先生に初めてお会いしたのは、1971 年(昭和 46 年)9 月であった。その日は、まだ夏の終わりにしては非常に暑い日だったと覚えている。私はその年の 6 月から研修を始めた国立大村病院の院長室に呼び出された。米国ニューヨークの病院で脳神経外科医として活躍し、帰国されたばかりの寺本成美先生を、その時の横内寛院長から紹介された。寺本先生は、体格が大柄で、にこやかな笑顔が何事も包んでくれるような、頼りがいのある人だというのが私の第一印象であった。横内院長は、私が学生の中から脳神経外科の道を志望しているというのをよく知っておられ、今は長崎大学には脳神経外科教室がないので、その教室が立ち上がるまで国立大村病院の研修医に、応募してはどうか、さらにアメリカで脳神経外科医として頑張っている寺本という人が、近く国立大村病院で脳神経外科を始めるとい話を聞き、研修医第一回生として国立大村病院で研修を始めたのである。

私としては脳神経外科の研修を始めたい一心だったので、寺本先生に初めて会ったのは、48 年も前のことであったが、心躍る出来事だったのでよく覚えている。国立大村病院は、スーパーローテート研修であったが、研修医の後半のほとんどは、寺本先生が立ち上げた脳神経外科のお手伝いをするようになった。脳神経外科領域には、ほとんど知識のない私は、あまりお役には立たなかったと思うが、親身になって教えていただいた。

当時、脳神経外科に関する日本語の教科書は少なく、寺本先生から頂いた脳神経外科の英語の診断書 Bing と手術書 Kenpe の本が私の最初の教科書となった。今でも大切に本棚においている。私は、2 年間の研修医を終えたところで、長崎大学にできたばかりの脳神経外科に入局し、臨床と研究に打ち込んだ。一方、1977 年(昭和 52 年)には寺本先生は、国立大村病院を離れ鹿児島大学の脳神経外科准教授として赴任され、しばらくの間お別れすることになった。しばらくというのは再び、一緒に仕事する運命が待ち構えていたのである。

私は、脳神経外科の専門医試験も済んで、研究論文も書き上げ、米国ロマリダ大学脳神経外科へ留学した。留学後は長崎大学脳神経外科に戻る予定になっていたが、留学も終わりに近づいたころ、横内院長より夜中 2 時ごろ留学中のアメリカに電話があり、長崎大学の森教授とは私が話をつけるので大村に戻ってこい、幸い、寺本先生も戻って来ているということで、とんとん拍子に話は進み、再び大村の地で寺本先生と脳神経外科を始めることになった。

のは、1983年(昭和58年)の5月であった。

寺本先生は、どういういきさつかは知らなかったが、1979年(昭和54年)には再び、国立長崎中央病院の脳神経外科に戻ってこられ、私が留学から帰った時には副院長として、頑張っておられた。その年、横内院長が急逝されたため、その年の8月に、寺本先生は急遽49歳の若さで院長になられた。その年は国立長崎中央病院にとっても、寺本先生にとっても、さらに横内院長が仲人をした唯一組が、私だったということもあり、私にとっても激動の年であった。この時以来、16年間、寺本先生が院長を退官されるまで、先生を支えながら一緒に生きることになった。

寺本先生との思い出

佐世保記念病院 院長 森山忠良

私が寺本先生を知ったのは入局前の研修医時代で、第二外科では医局内紛争だったと思う。第二外科に7名で入局した時は残念ながら教室は教授不在で、医局内選挙で土屋教授を選択した記憶がある。その当時、動き廻っていた先輩に寺本先生や伊藤先生等がいて、医局改革のための発言内容に同意した事を思い出す。次に寺本先輩と会話するようになったのは国立大村病院である。

私が脳外科で医局生活している時に父親が肺がんの終末期もあって長男として自宅近辺に戻るべきかで悩んだ。結果として全国学会を控えた森教授に迷惑をかけるわけも行かないと、辞職願いを出し、大村の国立病院へ転勤となったのは昭和54年9月だった。寺本先生は鹿児島大学の脳外科助教授のため、北島部長に中村研修医の三人で脳外科病棟の廻診を始めた。米倉医師は米国留学中で不在、そうこうするうちに二人とも国病へ戻って来て、医師5名体制となり急患対応や手術にも積極的に関与する事が可能となった。当時の横内院長が肝臓班への動きと共に、寺本部長には救急医療を積極的に進める事で医療・経営面が安定すると相談を受けたようだ。寺本部長より当方に救急医療専門医を確保する旨と共に救急患者への対応を進めるよう告げられたので、救急依頼があれば離島含め積極的に引き受けることになった。研修医が多忙時は自分がヘリやセスナに乗り対馬等へも迎えに行った記憶がある。更に朝は週一回の抄読会、新患紹介は週二回、手術が週三回もあるため、入院患者を見て廻るのは夕刻となり帰宅も遅かった。院内で夜間に出くわすのは同級生の増本君ら小児科だった。クモ膜下出血症例にはアンギオを頸動脈より実施していたが、その後は放射

線科医にアンギオ依頼し待機手術となった時期よりクモ膜下出血症例のまとめを米倉先生が係りとなった。大学では自分は経歴が浅く術者にはなれなかったため隠れて動物実験室の顕微鏡を利用して血管吻合等を一人で訓練していたので、北島先生に突然に「やっごらん」と言われた症例が高校生の脳動静脈奇形で予想以上に顕微鏡手術がスムーズに出来たので驚かれたが、その後は術者で動いたような気がする。手術で大きな問題となったのは下垂体腫瘍の手術で裁判となったことだ。寺本部長も副院長となられた時期で下垂体腫瘍へのアプローチで珍しく論争となった。手術後に視野障害が出現した事で、数年後に裁判となり約8年間も相手弁護士と論争したが、結果的には和解となった。この裁判時期に院長までなられた寺本先生にかなり苦勞と労力をかけた事は忘れる事は出来ない。手術を含めて御迷惑をかけたのはこの事件のみだと考えているが、他にも何かあったのかも知れない。

さて、私が脳外科部長へと進むと寺本院長より依頼を受けたのは診療報酬の点数チェック、患者の増加と手術数、地方会への演題考慮、研修医への指導等で救急医療の専門医は合格出来たので救急専門病院の標榜は可能となり県内のどこからでも連絡があった。また国の班研究では米倉先生がクモ膜下出血に対応し、私は頭部外傷で参加して研究費を確保した。手術も先輩の北島部長を乗り越えて米倉先生と二人で競争するかのように進んで良き成果を出した事により、九州地区の国病ではトップとなり、全国の国病でも国立循環器センターには太刀打ち出来なかったが上位クラスにはいたようだ。これらの事もあって寺本院長は国立病院院長協議会会長などを予想外に早めに廻って来たようにも思えた。

寺本先生を思い出すと医療面ばかりでなく、いろんな人生への考え方も多数習った事を思い出す。特に私や米倉医師は病院経営面に関しても指導を受けた。対馬では厳原病院が赤字経営中に勤務先の国立対馬病院を大きな赤字より脱却可能な改善策を進めた事で黒字までは至らなかったが離島県医療組合に加入させてもらった経緯は大きな出来事であった。現在、当方は民間病院で院長として9年目になるが倒産寸前の療養病院が良く回復したものと驚く事が多い。経営面について一人で悩んだり、走り回っている時に大村時代の動きが脳裏を走り回り出し、発想の転換が直感的に動き出すのは寺本先生時代の指導そのものが最大の要因と思われる。ところで、何かの会話中に寺本院長がゴルフに誘われるも行けず、体調管理を指摘した際に「当方はピンピンコロリ」を選びたいと言われた事を思い出したが、現実になろうとは全く想像もしていなかった。もう数年だけ長生きされたら各自皆さんも助言等受けられいろんな面で安堵した事があったかも知れないと思う事もあって、大村時代を振り返ってみると楽しさと寂しさが脳裏を走る時がまだ多いようだ。

この数年間に会った同門として、七種小児科医、築山産婦人科医、後藤糖尿病内科医、本川整形外科医、松尾心臓外科医、古川消化器外科医に永田事務長等と出くわすと必ず寺本先生の話が出て来て和気あいあいとなるのは皆さんも私同様に前進出来た大村時代を懐かしく思い出す環境を持っていた事が最大のポイントだろう。更に今年7月に93才で世界

されたFK氏が国立長崎医療センターへ多額の寄付をされた事は寺本先生と私がクモ膜下出血の手術を行って30年間程も元気に生活された事が大きな要因と思っている。

今後とも、長崎医療センターが研修医含めて医療や学問に経営面でも国内のトップレベルで走れるよう切に希望したい。

寺本先生の思い出

国立小浜病院 名誉院長 北島陽夫

1964年東京オリンピックの年、わたくしは長崎大学大学院生理学第二教室の大学院生でした。先輩の寺本先生がアメリカ留学から帰ってきたところで、講師を務めていらっしゃいました。

その時、大学院生は精神科の廣田先生、田川先生、整形外科の朝長先生、それに私でした。

廣田先生から中秋の名月を田上のM家での提案が出て、皆で出かけました。M家のご一家の歓迎を受けて、3人のお嬢さんにもお会いしました。

その後、寺本先生とM家のご長女との縁談が出てきて、びっくりしました。お見合いだったのです。

暫くして、結婚されて新婚家庭の奥様の手作りのお弁当が教室での昼の会食の話題になりました。皆、羨ましかったのです。

寺本先生は次第に大きな体格になりました。西日本生理学会が久住であった時、教室員、大学院生全員で久住山頂まで山登りをしましたが、寺本先生は大汗をかいていらっしゃったのを思い出しています。山頂で美味しい湧き水を飲んだことが忘れません。

私は当院で脳神経外科の医長をやったあと、国立対馬病院、国立小浜病院の院長を務められたのも、寺本先生の後押しのおかげで感謝しております。

鹿児島大学大学院助教授から大村に戻ってこられたときには、当時の横内院長にお願いして、ご本人に電話をして当院に戻ってくるように、と頼んでもらいました。これが、先生にとって、副院長からすぐに院長職につく大きな転機になったと思います。

いろいろ思い出は尽きませんが、これくらいで失礼させていただきます。

もう、没後15年にもなるのですね、ご冥福をお祈りいたします。

故 寺本成美先生の思い出

国病久原会 会長 廣田典祥

没後15年。寺本先生を知る人が少なくなった気がいたします。当院を大きく発展させた偉大な院長のお一人でした。亡き先生のお人柄を中心に、その思い出を記してみたいと思います。

<第一印象:大柄で優しい雰囲気をもつ人>

ずいぶん昔の話になります。先生に初めてお目にかかったのは(1965年)第二生理教室にいる時でした。体が大柄で優しくそうな雰囲気のある先生というのが私の第一の印象です。先生は研究面でも第二生理の主任教授、佐藤謙助先生からも一目置かれた存在でした。

当時、第二生理教室は伝統的に米国ロチェスター大学のシュナイダー博士の研究室に留学することを慣行とする雰囲気がありました。RSシュナイダー博士は小脳の電気生理学の世界的な権威です。佐藤教授もその弟子だったわけです。

私も佐藤教授と寺本先生の勧めで同大学の脳研究所に1年間留学する機会を得ました。私はすでに精神医学教室に所属していたので、専門領域から離れての1年間でしたが、既にロチェスター在住の寺本先生との交友が深まったのもこの時期です。度々ご自宅にお伺いし、倉橋研吾先生(岡山大学医学部の生化学名誉教授)と一緒に、奥様手作りのご馳走をいただきました。今でも、感謝の念を忘れることはありません。

<第二印象:生涯の努力家:米国在住時に神経生理、神経学、脳神経外科など幅広く研鑽された>

その後の寺本先生はECMFGをとって米国医師免許を取得され、ロチェスター大学病院の神経学教室に在籍し、その後ニューヨークの脳外科病院に就職されました。この間に、米国での厳しい臨床経験を積まれたのだと思います。

寺本先生は多くのことを語る先生ではないが、持ち前の粘り強い努力をされたことで、厳しいスタンスを獲得されたのではないかと思います。温厚な先生が、米国生活で自ら努力の達人みたいに大きくなられたのだと思います。

生涯にわたり、不断の努力を惜しまない人でした。

<第三印象:文系の側面を持つ医師:‘すとい・しーぶ(迷える子)’>

もともと、高校時代から、ペン・くらぶ、に所属し、「前列よりは後列に座る人間だった」と述懐しておられます。漱石などを読み、文系の側面を持った人でした。どちらかといえば、内向的な面も持っておられたようです。

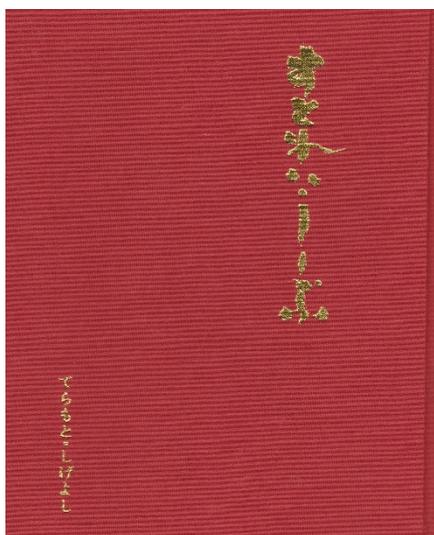
寺本先生は、私の知る限り、長崎大学医学部第二生理、同大学病院脳神経外科、米国ロチェスター大学脳研究所、同大学神経科、ニューヨーク医科大学脳外科、国立長崎中央病院脳神経外科、鹿児島大学脳神経外科、再び国立長崎中央病院脳神経外科、場所を変え、多くの経験を積んで来られました。まだ他にもあるかもしれません。

鹿児島大学脳神経外科助教授をしていた時、横内 寛院長の要請で、再び当院の脳神経外科に戻って来られました。

寺本先生は間もなくして、副院長になられました。ところが、ひと月も経たぬうち、横内先生がご逝去。しばらく間をおいて、院長に就任。初めて国立病院生え抜きの院長が誕生したのでした。

横内院長に引き続き、寺本院長の時代は、卒後臨床研修教育病院、ヘリコプターによる救急搬送による離島医療の支援、心臓血管外科手術、未熟児医療センター、WHO の肝炎協力センター、県下初の救命救急センター設置など、時代の先端医療をことごとく導入した先駆的な医療機関として飛躍をしました。

脳神経外科には当時、北島陽夫先生(国立小浜病院名誉院長)、森山忠良先生(元 国立対馬病院 院長、現佐世保記念病院院長)、米倉正大(当院名誉院長)、馬場啓至先生(元当院脳神経外科部長 西諫早病院 外科・てんかんセンター長)など、多彩な顔ぶれで、小生も神経カンファレンスの一員として顔を出していました。



還暦を迎えられた先生は記念出版の自著
(‘すたれい・シープ’ 平成6年、合同印刷)を出されたので、どこかご自身を、夏目漱石の著書「三四郎」の主人公の姿(ストレイ・シープ、迷える子)を自分に重ねておられたのでしょうか。青年期の多くを海外ですごした事、国内でも分野の少しずつ異なる領域を幅広く経験された事、様々な精神的軌跡を回想するには、この Stray Sheep がもつともふさわしいと思われたのでしょうか。

<第四印象: 病院長として、不撓不屈の人>

病院長になられてからは、獅子奮迅の活躍をされ、信念を通す、曲げない、不撓不屈の迷うことのない院長となりました。

当時、誰も思いつかない「国際医療協力」を提唱されました。

ある日、寺本院長から、精神科医長をしていた私を呼びつけて「副院長になれ」と命令されてしまい、困惑しました。結局、否とは言えませんでした。

すぐに私は、副院長就任報告のために、国立病院を所管する厚生省国立病院課を訪れ、病院課長にご挨拶をしました。その際、寺本院長より預かった「病院の現状と展望」をまとめた冊子を提出しました。

病院課長はこの書類に目を通し、「国際医療協力」に関するところが述べてあるところをすぐに気にとめられました。未だ国交正常化していない国の医療機関(中国の「黒龍江省ハルビン鉄路中心病院」)との協力関係を結ぶことに関し、その場で、強く制止されました。「国交のない国との民間交流を締結することは不可である」とのこと。

その後、「国際医療協力」は当院が先鞭をつけたのです。次第に海外との交流が盛んとなり、外国人の研修も積極的に受け入れています。現在ではそれは国の政策医療の一つに発展しました。

このように寺本院長は壮大なコスモポリタンの視野を持っておられたと思います。この先見性には驚くばかりです。

国立病院再編成計画の最中、当院が高度総合診療施設として、全国で10施設中に含まれる事が決まった時、院長とともに小躍りして喜んだことを思い出します。今日の長崎医療センターの整備計画が、この時点で決定されたと言えます。今日の威容を誇る病院建築と整備のスタートラインとなったのでした。

<第五印象:傑出したリーダーシップ>

寺本院長は全国の国立医療機関のなかで、強いリーダーシップを発揮されました。

かつては国の全病院の8割を占めていた国立医療機関は国立病院と国立療養所に別れていました。高度成長期になると民間の医療機関も増え、国立病院・療養所は本体が大きすぎ、職員の業務も非効率化して行き、会計も悪化し、次第にその存在理由が問われるようになりました。

国から国立病院再編成計画(統廃合案)が出されると、労使が対立で団体交渉が頻発し、混乱していきました。国立病院長(90名)・療養所院長(14名)・高度医療センター長(6名)の院長協議会は別々にありましたが、それを一つにまとめ、病院と療養所が一体となって議論すべきということになり、新しく統合した院長協議会の初代会長に寺本院長が選出され、その取りまとめ役を果たされました。

さらに、平成2年9月、湾岸危機のとき日本医療団先遣隊のチームリーダーとしてクエート国境近くサウジアラビアに率先して出かけられたときには仰天しました。帰国後、軍事大国の尖兵だという批判も受けられた。身の危険もあったのか、警察の警備を受けられたそうです。

このように、何事も率先してリーダーシップを発揮されました。

次に、寺本先生のリーダーシップの特徴を考えてみました。

それは、幅広い人脈を利用されること、広範囲の人との通信やコミュニケーションを大切にされること、リーダーシップへの強い志向、読書やこまめな執筆、情報誌を丹念に読み込む、幹

部会議のあとの酒宴などもよくされていました。院長室に伺うと、あらゆる印刷物をしっかり見ておられる、他人との対話を好んで、相手の心に共感しつつ、その心を掴むことが上手な方でした。一方では、非合理的と思ったときには、毅然として自分の考えを述べておられました。病院職員全体を動かすのが巧みで、「国病久原会」も院長の発案で誕生しました。先見性、率先垂範、強力な信念の持ち主との印象をもっています。

先生には公私とも、大変お世話になりました。心より追悼の意を捧げます。

あとがき

医師は年齢を重ねると、リーダーシップを担うときが必ずやって来ます。それは若いときから心得て置かねばならないことです。医療チームという組織を管理する責任ある立場に立たされるのです。そのためには、単に臨床経験を積み重ねることだけでは済まされない、広い視野が必要となります。

寺本院長は卓越した行動力を我々の前でじかに示してこられました。それは暗黙の教訓として私達は取り入れてきたように思います。

この追悼記には、当院を作ってきたOB達の小さな歴史が記されています。その歴史は過去のことであり、身近に見えるものではありません。しかし、こうした記事の本質的な箇所を見抜いていただけるなら、読む人の知恵の一部になるかもしれません。

(文中、医師の個人名の記載箇所があります。全て一私人ではなく、いわば公人としてご活躍された方々ばかりです。国病久原会の趣旨「旧職員間の旧交をあたためること」により、また執筆者との親しい関係の上で、暗にご了解を得たものとして、個人名を使用していることをご理解ください。

国病久原会 会長 廣田典祥)